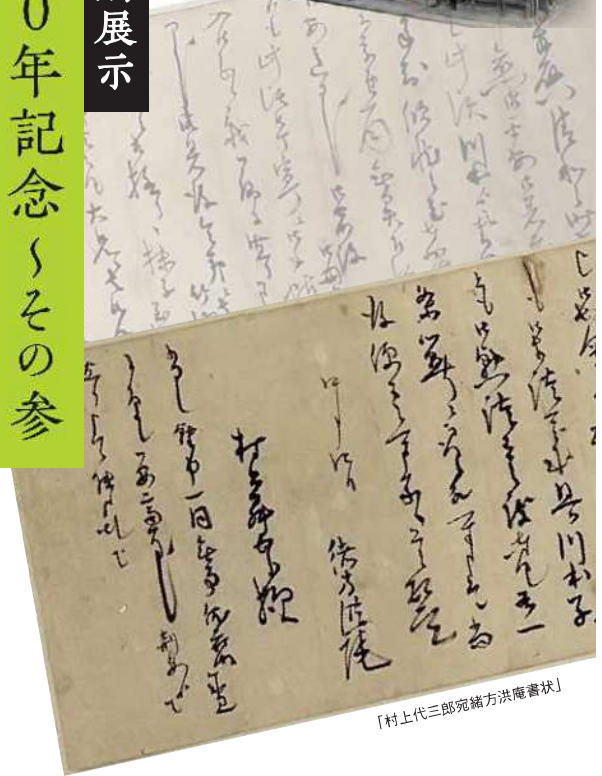


令和五年度 適塾特別展示

シリーズ生誕2000年記念くその参

村上代三郎



「浜松藩宛建白書下書」



播州木梨一村上塾



「村上代三郎宛諸方洪庵書状」

今年、適塾最初期の塾生・村上代三郎の生誕200年です。適塾入塾録「適々齋塾 姓名録」には4番目に署名しています。

代三郎は、文政6年(1823)、木梨村(現・加東市)に生まれます。村上家は、代三郎の祖父村上玄齡の代より医学・蘭学塾を開き、玄齡には緒方洪庵と親交のあった原佐一郎(1783-1854)、代三郎の父・良八(三草藩医)には坪井信道塾で洪庵と同門だった川本幸民などが師事しました。

代三郎は、幼い頃から勉学に励み、天保11年(1840)末頃、適塾に入門します。嘉永2年(1849)には江戸で伊東玄朴に学び、西洋兵学に傾倒し、翌年には砲術家で葦山代官の江川坦庵(1801-55)の客分となります。その後、母の病気により一旦帰郷するものの、安政4年(1857)には幕府から講武所(西洋式軍事訓練機関)の師範に招へいされます。

しかし翌年には眼病を患い帰郷を余儀なくされ、その後は家塾で教育に携わったり、医業を営むなどします。それでも代三郎の見識は、諸藩のみならず要人からも頼りにされていました。伊藤博文(1841-1909)が代三郎を訪ねたという話も伝わっています。北播磨の山村に住まいながら、日本の近代への飛躍を支えた人物がいたことは注目に値します。

今回の特別展示では、これまで適塾記念センターに寄贈された村上家伝来資料を中心に、代三郎の事績を紹介いたします。

会期

5/30(火) - 6/11(日)

会場

適塾 (史跡・重要文化財)
開館時間: 10時~16時
541-0041 大阪市中央区北浜3-3-8

一般 270円(140円)、学生 140円(80円)
※()内は20名以上の団体料金、要事前申込み、詳細はホームページ参照
※学生は、大学生、高校生又はこれらに準ずる。
小学生・中学生 無料 ※中学生以下の方は引率者が必要
大阪大学の学生 無料 ※要学生証提示



洪庵に高く評価された学識

「村上代三郎宛緒方洪庵書状」

嘉永2年(1849)、代三郎は江戸に向かいます。代三郎が江戸に到着したことを知った洪庵は、江戸での修学について助言を手紙にしたためました。洪庵は、代三郎の学識を高く評価し、「いまさら江戸において師とすべき大家もいないだろう。」と述べています。その上で、江戸の名だたる蘭学者に相談するのはよいが、弟子入りすることは避けるよう念を押しています。優秀な弟子の将来を気にかける洪庵の思慮が窺えます。



「村上代三郎宛緒方洪庵書状」 嘉永2年(1849)
大阪大学適塾記念センター所蔵(村上家資料)

洋学者・兵学者として幕府に出仕

「講武所賞状」

代三郎は安政4年(1857)、幕府講武所の師範および蕃書調所出役教授手伝に就任します。講武所とは、ペリー来航を機に安政元年に幕府が開いた西洋式軍事訓練機関で、蕃書調所は安政3年に設置された洋学研究教育機関です。この賞状は、代三郎の精勤に対して、銀10枚を贈ると記されています。代三郎は、招へいの翌年には眼病のため帰郷を余儀なくされます。1年ほどのわずかな出仕でしたが、その功績を賞して授与されたものといえるでしょう。



「講武所賞状」 年未詳
大阪大学適塾記念センター所蔵(村上家資料)

西洋兵学の必要性を訴える

「浜松藩宛建白書下書」

浜松藩に対し、自らの兵学教育・外交・国防について述べた建白書の下書。代三郎は、自らの扶持分で賄うので、藩士の中から二、三人抜擢し、西洋兵学を仕込みたいと願い出ています。そして当時、諸外国との通商が許可され、もはや戦争は起きないだろうと油断し遊惰に過ごす向きを戒め、将来を見据えた軍備や人材の引き立てなどが必要だと強く訴えています。日本の行く末を案じ、西洋兵学教育に取り組もうとする姿が浮かびあがってきます。



「浜松藩宛建白書下書」(部分) 村上代三郎 安政6年(1859)
大阪大学適塾記念センター所蔵(村上家資料)

村上代三郎の生涯を綴った

「村上代三郎履歴書」

代三郎の出自から亡くなるまでの生涯の履歴を詳細に綴ったもの。「三草学校試験用紙」の裏に記されており、草稿と見られます。若くして勉学に励み怠らなかったこと、適塾に学んだこと、砲術家で葦山代官の江川坦庵に才能を認められ砲術家として活躍したことなどが書かれる一方、郷里で老母を養うため志を遂げられなかったともあります。ただ、郷里に身を置く代三郎を、伊藤博文が来訪した話なども伝えており、その功績を称えています。



「村上代三郎履歴書」(部分) 年未詳
大阪大学適塾記念センター所蔵(村上家資料)